

華やか哀愁萌芽の舞台

600年にわたって男性を中心に発展し、「男の芸」という風潮が強かった能の世界で、女性能楽師が注目を集めている。舞台上がる機会に限られ、演じることが許されない演目もあるが、男性に負けない技量を持つ女性の力を生かした新作能が成果を上げ、国の重要無形文化財保持者（総合認定）にも昨年初めて女性が名を連ねるなど、伝統の厚い壁にも変化が起きている。

（梶井政則）

シテター05

「女による女のための女の能」と題した催しが昨年末に横浜で、2月には新潟で開かれた。演目は新作能「小野浮舟」。シテ（主人公）を演じ手全員と囃子の笛方、8人いる地謡の半数が女性という異例の配役。企画した横浜能楽堂の中村雅之は「無視できない存在となった女性の活躍の場をつくり、男性と違った能の新たな魅力を発見したいと思った」と語る。新作は、10代から能に親しみ、七五調の文章にも精通している歌人の馬場あき子に依頼した。だが馬場は「実は私自身が女に能は無理だと思っていた」と振り返る。疑念を抱いたまま書き上げた新作だったが、本番の舞台に驚いた。シテを務めた観世流の津村聡子（40）の技量と度胸に舌を巻いた。

演出を担当した梅若六郎は「女性が生かせる能のあり方を真剣に探る時期に来ている。今研究を始めれば50年後くらいには新たな能が確立する可能性は十分にある」

現在250人が活躍

能楽師は能楽協会に加わるとプロフィールが見られる。現在1500人余りで、うち約250人が女性だ。その数は戦後少しずつ増えてきたが、女性が能を舞うことには今も異論が多く、その存在が軽ん



女性ばかりの演じ手で上演された新作能「小野浮舟」の一場面（横浜能楽堂提供）

新作で成果着々 重文に初の認定

昨年9月、国の重要無形文化財保持者（総合認定）に女性能楽師22人が仲間入りした。これまで793人が認定されてきたが、女性

は初めて。シテ方宝生流の女性では最古参の倉本雅（74）も選ばれたが、知らせを受けた時は「何を今更」と思ったという。「私が手ほどきした男の人はどうも保持者になっていて悔しさもあった。断るうかと思っただけれど、後に続く女性のためにと考え直した」と話す。

10歳から能の稽古を始め、先代の家元の内弟子を経てプロになった。男性と同じ厳しい修業を積み、師匠の重い荷物を持って地方公演にも出かけた。体や声も大きく、芸は男性に負けない。約170人の素人弟子を全国に抱える。

まだ残る閉鎖性

プロになって半世紀。だが今でも「翁」という能を上演する楽屋には「女性だから」という理由で入れない。舞台の幕を上げ下げする裏方をしていた露伴に嫌な顔

をされたことも。倉本は「昔と比べると少しは変わったけれど、まだまだ」と言う。

同じシテ方宝生流の内田芳子（67）は4月、能「道成寺」を舞う。若手能楽師の「卒業試験」ともされ、男性なら30歳前後で出演する演目だが、宝生流の女性がシテを務めるのは初めて。「いつかは、と夢見ていた」と言う内田に家元から許しが届いたのは2年前だった。体力と気力が求められる演目なので演じるにはぎりぎりの年齢だ。「フレッシヤーを感じるがやり遂げたい」と語る。

大島衣恵（30）はシテ方喜多流唯一の女性プロ。祖父、父とも能楽師という家柄で幼い頃から稽古はしていたが、喜多流には当時「女性プロになれない」という暗黙の了解があった。だが能をあきらめきれず、他の流派の女性の存在にも刺激された。願い出た時の議論は百出だったが、7年前、最終的に認められた。

年に1度はシテとして能の舞台に立つ。「もし私の芸がたないなら、それは女性だからではなく私自身に力が足りないから。子供の頃から触れているためか、男性向きの芸だと感じたことはない」と言う。

少ない経験の場

シテ方観世流の松井美樹（36）は能とは全く関係のない家の出身だ。「あなたも業上になれる」というボスターに惹かれて大学の能楽部に入部し、能に魅了された。卒業後は師匠の自宅に7年間住み込んで修業を続け、4年前に「石橋」のシテを務めて独り立ちを果たした。

自ら選んだ道だが、年を追うごとに難しさが身に染みる。一番の悩みは舞台上立つ機会の少なさ。シテを務める以外にも先輩と同じ舞台上立つ学ぶべきことが必要なのに、女性は共演者として敬遠されがち。同じ年代の男性と経験に差がつく。「女であるゆえの厳しさはある。でも人の心の動きを表現する芸に男女の差はないはず。まず1人の人間として真摯に能と向き合いたい」と話す。

「600年男の芸」世界で注目集める女性能楽師

仕舞を舞う大島衣恵。「能を演じているとワクワクする」と言う

